

個人の将来予測における
「ふつう」バイアス：
固有文化心理学による検討

論文要旨

東京大学大学院人文社会系研究科
社会文化研究専攻 社会心理学専門分野

大橋 恵

論文要旨 1

個人の将来予測に関しては、平均的な人と比べ自分が経験する可能性である相対的可能推定を用いた研究が数多くなされてきた。相対的可能推定には様々な規定因があるが、ほとんどの実証研究は出来事の幸不幸に関心が集中しており、「楽観・悲観」を議論していた。欧米においては、ほぼ普遍的に出来事の幸不幸が相対的 possible 推定に正の影響を与えること、すなわち楽観的であることが示されている: 幸福な出来事は平均よりも自分に特に起こりやすく、不幸な出来事は逆に平均よりも自分に特に起こりにくいと予測する。一方、日本人は、幸福な出来事に関しては悲観的であり、不幸な出来事に関しては楽観的であるという傾向が見られ、楽観・悲観(あるいは出来事の幸不幸の効果)からは解釈できない。

しかし、日本人の心理を欧米の枠組みである「楽観・悲観」からとらえることができるのだろうか。著者は、これは日本人にとって特に重要な要因が考慮されてこなかったからではないかと考えた。具体的には、その出来事を経験することによって自分のことを「中庸である、内集団から飛び抜けていない」、すなわち、「ふつう」であると考えられるかどうかという観点から考えた。

本論文では、「ふつう」という日本人にとって意義のある次元が、日本人の個人の将来予測に大きく影響していると予測した。すなわち、人を形容するときの「ふつう」には良い意味が付加されているため、自分を肯定的に見る動機が日本人にもあれば、自分のことを「ふつう」であるとみなしたい動機から、それが行き過ぎて、ときに自分の「ふつうさ」を過大視すると考えたのである。この「ふつう」さの過大視は、相対的 possible 推定を用いた個人の将来予測に以下のように現れると考えた: 日本人は、出来事の幸不幸にかかわらず、高頻度の出来事が平均的な人と比べて自分に起こる可能性を、低頻度の出来事が平均的な人と比べて自分に起こる可能性よりも、高く評価するだろう。先行研究は低頻度の出来事が主に用いられているため、この予測に当てはまると考えられる。以上のような研究目的を 1 章で述べた。

次に、大前提である「ふつう」という語の意味と望ましさについて 2 章で検討した。それは、自己や平均的他人という人物についての認知に「ふつう」という概念がどのように作用するかを検討するためには、まず「ふつう」「ふつうの人」に日本人がどのような意味や価値を付与しているかを調べる必要があるからである。まず、辞典類に記されている「ふつう」の意味を調べた。次に、一般の現代日本人も辞典類に記された意味を共有しているかどうかを確認し、「ふつう」の望ましさを検討するために、大人 50 名・大学生 54 名にアンケート調査を行った(研究 1)。その結果、「ふつう」という語には、以下の 3 つの意味が認められた: 特に優秀でも特にユニークでもない、中程度でよくある、特に劣ってなくてノーマル。また、「ふつう」は中立的に評価されていた。

さらに、文脈により語に付加される意味づけが異なる可能性があると考え、人を形容する語としての「ふつう」の望ましさを検討した(研究 2)。大学生 150 名及び社会人 61 名にある一定の条件にあった人物を想起させ、その印象を測定する方法で、人を形容する「ふつう」には良い意味が強く、「ふつうではない」には悪い(大学生)あるいは中立的な(社会人)意味が強いことを示した。

第 3 章では、本論文の基本命題である、日本における「ふつう」バイアスの存在を検討した。具体的には、生起頻度の高い出来事(例: 幸せな結婚をする、インフルエンザにかかる)は平均よりも自分に特に起こりやすく、生起頻度の低い出来事(例: 宝くじで大金を当てる、殺される)は平均よりも自分に特に起こりにくいと考えると予測した。さらに、さらに、自分を「ふつう」だとみなす人ほど「ふつう」バイアスが強いという個人差を予測した。まず質問紙研究を行い、次に、因果関係を明確に吟味するた

めに実験室実験を行い、さらに、一般化可能性を検討するために無作為抽出された大人を対象に郵送調査を行った。その結果、出来事の生起頻度の影響は出来事の幸不幸と関係なく見られた。平均と比べた可能性である相対的可能性推定を指標としたため、その平均が「平均と同じ」よりもずれる論理的な根拠はない。そのため、これはバイアスであると言える。質問紙研究・実験室実験・郵送調査という三つの異なる手法、女子短大生・国立大学の大学生・一般の大人という三つの異なる対象を用いて同じパターンが得られたので、頑健な結果と言えよう。

このようなバイアスが生起する理由はいくつか考えられるが、著者は、以下の点から、自分の「ふつうさ」を過大視している現象であると考えた。(1)個人の将来予測における「ふつうバイアス」の大きさは、自分を「ふつう」だとみなしている程度(研究 3, 4, 5, 6)と正の相関があった。(2)日本において、人を形容するときの「ふつう」には望ましい意味が付加されている(研究 2)。したがって、自分を良い存在だとみなしたいがために、自分の「ふつうさ」を過大視するというメカニズムが考えられる。(3)実際に、「ふつう」バイアスの大きさと「ふつう」を望ましく評価する程度には正の相関が見られた(研究 6)。

続く第 4 章では、では、日本人のみを対象にして得られた上の知見が、他の文化においても見られるのか検討するために、アメリカとの比較研究を行った(研究 6)。その結果、アメリカでも出来事の生起頻度が高く知覚されているほど相対的可能性は高く見積もられていた(「ふつう」バイアスを示す)が、日本人よりのほうがそのサイズは大きいという結果が得られた。また、「ふつうさ」を望ましく評価する人ほどこのバイアスのサイズが大きいという相関関係もやはり日米で見られた。ただし、自分を「ふつう」だとみなす人ほどバイアスが大きいという関係は、日本データでのみ有意だった。

日本での価値観についての考察から導き出された「ふつうさ」の過大視という現象・解釈だったが、アメリカデータから、日本固有のものではないことが示された。ただし、「ふつうさ」を望ましく評価する程度には日米差がなかった。そのため、本論文で仮定している「ふつう」が望ましいから得ようとするという心理プロセスではなく、文化にかかわらず、人間には自分の「ふつうさ」を過大視する認知的なバイアスがある可能性が示された。

最後に、第 5 章にて、研究全体をまとめた上で、本論文の意義や今後の課題について述べた。個人の将来予測における「ふつう」バイアスという新たな現象を見いだしたことが、本論文の貢献であろう。「ふつう」バイアスは、個人の将来予測に関する従来の枠組みである楽観・悲観からは説明できない現象である。本論文の意義は、日本人の相対的可能性推定を西洋モデルで判断することの限界を指摘し、日本人の個人の将来予測は欧米人とは違う意味で非現実的であること、つまり、「ふつう」の方向に歪む傾向があることを示した点にある。さらに、今回行われた 4 つの研究で一貫していないものの、出来事の幸不幸が相対的可能性に与える影響は少なくとも負ではないことが示された。つまり、出来事の生起頻度知覚も考慮した場合、日本人は日本人は少なくとも悲観的ではないことがわかった。これに加えて、出来事の幸不幸が相対的可能性に与える影響の大きさには、出来事の生起頻度知覚も考慮した場合は、日米で差が見られなかった。研究 6 は相関研究である上に、幸福な出来事と不幸な出来事を別々に分析しているという制限があるため、この結果のみをもってこの点を決めることはできない。しかしながら、非現実的な楽観性が北アメリカ人よりも日本人で低いという知見があるが、それは出来事の生起頻度という重要な要因が考慮されていなかったためかもしれないと、本研究から指摘できる。

今後の課題は二つ挙げられる。ひとつは、前述した心理プロセスの解明である。日本人は自分が「ふつう」であると過度に認知する傾向があるという前提を置いたが、この前提については検討されていない。このバイアスが実在するかどうかについて確認を重ね、その心理的プロセスについてさらに

検討する必要がある。二つ目の課題は、日本での「ふつう」の望ましさに関する問題である。世間の人は「ふつう」を望ましくとらえていると認識しているものの、自分自身はあまり「ふつうさ」に価値を置いておらず(研究 6)、しかしながら他の人を評価する際に「ふつう」はどちらかといえばよい意味を持つという(研究 2)、「ふつう」の望ましさに関しては矛盾した日本人のデータが得られた。「ふつうさ」は、日本において、個人的に価値を置いているかどうかはともかく、個人が認識している社会全体の価値として機能している可能性がある。今後は、日本人にとって「ふつうさ」がどのような意味を持っているのかを探っていきたい。(3681 字)